



イイケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 640 回 とてもなれない、1 万時間の「コラムのプロ」

2015.8.2

縁あってまた、起業家のための「創業塾」を開催している。夢と希望を抱きつつ、果敢にチャレンジせんとする彼らに、とにかく「3 年間は必死に頑張ってみなさい」と言ってきた。

諺にも「石の上にも三年」とあるが、この3年、実は約 10,000 時間になる。人より秀でる人は、必ず人より努力している。とすれば1日8時間労働なんて、サラリーマン気分ではやっていけない。だからきつと、毎日 10 時間を休みなく続けて 3 年間(10 時間/日×365 日/年×3 年)で 10,950 時間、つまり約 10,000 時間必要となるのである。3年やれば、どんな職業や役割も、だいたい一人前になるといいかも知れない。

何かのプロフェッショナルになるためには、10,000 時間必要と言われている。これを「**1万時間の法則**」といい、マルコム・グラッドウェル(Malcolm Gladwell)という作家が、2007 年に『**天才！成功する人々の法則**』という本の中で提唱した理論である。偉大な成功を成し遂げた起業家や、世界的に有名なスポーツ選手など、何かの分野で天才と呼ばれるようになる人達に共通しているのは、10,000 時間という、それまでに打ち込んできた「時間」が関係しているというものだ。1万時間より短い時間で、真に世界的なレベルに達した例を見つけた調査はないといい、まるで脳が1万時間を必要としているかのようだと言っている。

あの、天才 W・A モーツァルト(Wolfgang Amadeus Mozart)。彼は6歳から作曲をはじめ、高く評価されたピアノ協奏曲「ジュノム」(K271)を発表したのは21歳の頃だった。W・A モーツァルトは作曲を始めてから傑作を世に送り出すまで15年以上かかっている。不世出の天才 W・A モーツァルトでさえ、本来の才能を発揮するのは、作曲時間が1万時間を過ぎた後のことである。

10,000 時間費やさないで、中々ものにならないし、10,000 時間かけたとしても、必ずものになるとは限らない。世の中、そう簡単にはできていない。

例えば小生のこの、コラム。

誰から言われた訳でもなく、テーマも決まらず、いい加減極まりないまま、今回で 640 回を数えた。

毎日曜日、「1週間に1本」ペースで書き下ろすとして、12年も書き続けてきた。

テーマにもよるのだが、コラム 1 本書くのに30分から、調べ物があると8時間以上かかることもある。平均4時間だとして 2,560 時間だ。12年も書いてきたと言えど永そうに見えるが、実はまだ、わずか 2,560 時間、107 日分しかコラムに費やしていないことが分った。

10,000 時間は遠く及ばず、とても、人様に読んで頂くレベルではないのが明らかなのである。

自己満足のマスターベーション、無理矢理送り付けられた人は、まるで脅迫文のようだ。

このペースでいけば、「10,000 時間の**コラムのプロ**」になるには 35 年以上かかることが判明した。

小生100歳まで迷惑をかけ続ける、さすがそこまでできる、図太い神経は持ち合わせていない。

ボチボチ、コラム、止めようか…そんな囁きが、次第に大きくなっていくに違いない。